

空間的により遠い距離にある程に、顕在化してくる。それは、効率的、安全的なアプローチを辿らねば、とうてい実現し得ぬ場合である。

技研は、発足以来、地道な種重ねのなかから今日の技術を習得してきたのであり、決して一夕に現在があるのではない。そこには、その年々の部員の努力があったのである。そして、今や、海外の山々すらも征服しようとするところまで成長した。しかし、技術は限りのあるものではなく、又、時の流れは、我々の歩むスピードよりはるかに速く、レベルも上がっていく。加えて、我々のフィールド自体が、これまた異常な早さで狭くなり、我々の活動そのものが前時代的だとすら云われるようになってきている。一方、我々の活動は常に生命の危険にさらされていることは避けられない事実である。こうした背景にあっては、我々は日々の活動をもう少し系統的に行なっていく必要があるのではないだろうか。その一つとして、会としての長期計画の立案、そして、それにそった新人からOBへの段階的指導カリキュラムの作製も効果があると考えられる。これはこれまでににおいても幾度となく論議されてきたが、この機会にもう一度研究してみるべきであろう。唯、重要なことは、これらの計画、カリキュラム等が個人を縛る為のものであってはならないと云うことである。(1971.2.)

事 故 報 告

昭和43年夏期合宿ストーブ引火事故

合宿概要

探検部技術研究会夏期活動として7月16日より28日迄、北アルプス剣岳にて岩登り訓練を行なったのち、29日より8月9日迄黒部川支流祖母谷並びに祖父谷全域を溯行し、冬期合宿の偵察の為、8月10日より唐松岳五竜岳並びに鹿島槍ヶ岳を経て国鉄信濃大町駅にて合宿を解散する予

定であった。

事故発生日時及び場所

昭和43年8月11日午前3時20分。唐松岳キャンプ場

事故発生状況

7月10日午後7時30分 上記キャンプ場において就寝するが、台風7号の接近により風強まり、午後9時45分風の為、テントの支柱折れ、ビッケルにて補強するが、風が増々強くなるので家型のテントを屋根型に建て直し、テントの内側に石を置いて吹き飛ばないようにする。朝方、風も弱まっていたので朝食をすませひとやすみした上で出発の用意をし、ガソリンストーブ（炊事用・商品名ホェーブス）のエアを抜いた際、燃料の気化ガスが附近にあったローソクに引火した。急拠消火につとめたが、前述の通りテント内の置石の為、行動を阻止され、事故を大きくした。

負傷者の氏名と負傷程度

安沢 寛 （社会学部1回生）

大阪府豊中市庄内東町6丁目9-9

火傷全治3ヶ月

両手（手首より先）重傷 顔及大腿部軽傷

越智 修 （工学部1回生）

大阪府枚方市伊賀北町9の23

火傷全治1ヶ月

左手（手首より先）重傷

勝野 優 （文学部3回生）

神戸市東灘区御影町西平野天神山19の1

火傷全治2週間

左腰部軽傷

活動概要

探検部技術研究会春期トレーニングとして2月26日より、3月1日迄、鈴鹿山脈御在所岳藤内沢周辺にて氷雪トレーニングを行う計画であった。

事故発生日時及び場所

昭和46年2月28日午前11時30分。御在所岳藤内壁前尾根側壁ルンゼ。

事故発生状況

2月28日、前日来の陽気で藤内沢の氷雪がやゝゆるみ、この日は2パーティに別れ、上記前尾根側壁ルンゼを登行した。このうち上流壁に取りついたパーティの先頭の会員が、ルンゼの核心部を通過後スリップし確保した会員が負傷をした。

負傷者の氏名と負傷程度

三星善業（工学部2回生）

大阪府吹田市上山手町16-22 西野様方

前頭部裂傷全治2週間

研究

1. 沢登りと装備

小野 竜 弥

こゝに言う沢とは黒部川の支流に見るようなビヴェークを何日も続けるような重装備のものを対象とし、装備を中心として沢登りにおける生活を述べようと思う。尚〇〇沢〇〇壁のような積極的に人工登攀を駆使するものは沢登りの範囲に含めていないし、また技術上のことには多くはふれていない。

1. 共同装備

1-1 生活用具

a テント

沢登りにおける標準的なパーティは2～4人が適当であり、こ